

(宮川さん、奥さんとうまくいったのかしらん：
：)

そうあって欲しいと願う気持ちと、また『はま
ゆう』へ来て親しくして欲しいという気持ちが
里子の心の中で複雑に絡み合い、整理がつか
ない。

里子は、白いリボンがかかったネクタイピンの箱
をしばらく眺めていたが、シオルダーバッグに入
れた。

列車が動きはじめる頃には、朝が早かったせい
か疲れて眠くなってきた。他の乗客もコックリ
コックリ頭を揺らして眠っていた。里子は温か
いお茶を一口飲んでから、周りの席に誰もいない

のかしらん、と心の中で反論した。

淳一の写真を飾らない理由は、テレビドラマだ
ったか映画だったか忘れたが、夫の写真が入っ
た額が風で倒れて、それが死を知らせる合図だっ
たという話があった。その場面に里子の脳裏に貼
りついて離れない。そんなの偶然の一致に過ぎな
い、と思っても、写真は飾れない。

狭い座席で背中を丸めながら、いろんなことを
考えていると、姉からもらった土産の箱の角か、
化粧道具かわからない物が、コツコツ頭に当た
る。頭を右へ左へと動かしているうちに、やが
て睡魔が訪れてきた。

ことを確かめてから、旅行カバンの上へ頭を預
け、上半身を横たえた。

目をつぶると、栗林公園の梅林で写真を撮る真似
をしていた宮川の姿が浮かんでくる。息子が死
んだとき彼の写真はとおかた捨ててしまったと
いう宮川の心に、自分はどんな映像になって残
されているのか、里子は気になった。

淳一の写真を額に入れて飾ったことがない里子
は、ときどき自分の心にある彼って、どれほど
正確なものなのか不安になり、写真ブックで確か
める。そんな習慣を知人に話すと、「ご主人の顔
を忘れるなんて、冷たいのね」って言われた。そ
のとき里子は、この世に確かな物って本当にある

誰かに肩を揺すられている。

里子は目を開いた。見知らぬ男の顔が覗き込
んでいる。

「お客さん、高松へ着きましたよ」

車掌は事務的な声で言った。

目をしばたきながら辺りを見回すと、少なかつ
た乗客が、誰一人見当たらない。

里子は、ぼんやりした頭で改札口へ向かう。

「すみません。前の席空いていますか？」

薄暗いホームに宮川の声が蘇る。

目覚めてくるにつれ、里子は彼と出会ったのが、
夢だったような気がしてくる。

改札口まで来て、キップを出そうとシオルダーバ

ツグを開けると、ネクタイピンの箱が手に触った。
里子は一瞬立ち止まったが、そのまま改札を抜
けて行く。

人気の絶えた駅舎にヒールの音を響かせ、里子は
現実の自分に向かって歩く。

完

(以上8月12日放送分)